事務局 amateur スタッフによる

フォロー・アップ メモ・ランダム

縄文から弥生にかけて大陸や半島から多くの文物(技術と製品)が入ってきました。そのころの倭人は独自の文字を持っていなかったと言うのが通説となっています。情報の伝達や記録は音声によっても実現できます。稗田阿礼は皇族の歴史について膨大な量の情報を暗通していたとされますが、彼(彼女)は特殊な能力を持ち合わせていたからできたことで、普通の人たちには到底無理なことでしょう。古代人たちは中国で発明された漢字を習い、使うことで情報の伝達や記録を行うようになりました。最初はすべて漢文でした。中国語の文法まで習得するのは大変です。平安時代まで下るとその漢字から独自の工夫で片仮名と平仮名を生み出し、喋り言葉の「音(オン)」をそのまま記録できるようになります。しかし、そこに至る万葉の時代には、漢字のオンを借りて表現する「万葉仮名」を使っていました。

	ま	み甲	み乙	む	め甲	め乙	も甲	も乙
木簡	麻末万	弥美見*		牟无	売	米目*		毛母
『古事記』	麻摩广末	弥美	味	牟无武	売咲	米	毛	母木
仏足石歌	麻	弥美	微	牟无	売	米		毛母
『万葉集』	麻万末	弥美民見三**	未	牟無	売	米目*		毛聞母
『正倉院文書』	万末	美		牟		米		毛

左の表は、レジメNo.5の「実用万葉仮名」の‘ま行’を抜き出したものです。万葉仮名はこの表にある漢字ばかりでなく、もっとバラエティに富んでおり、例えば“も”について万葉集などでは、表の漢字以外に、裳、方、藻、文 、物、面、喪、問、蒙 、哭、勿、茂、忘、悶 、雲、望、裙、門、畝、の漢字が使われています。万葉仮名は、同じ言葉や単語でも歌によって、或いは歌を詠んだ人によって様々な漢字が使われています。次の万葉仮名で書かれた5首は万葉集の短歌ですが、傍線の部分はいずれも「みつつしのはむ(＝見つつ偲はむ)」と読みますが、それぞれ異なる漢字を使っています。

①巻二　直相者　相不勝　石川尓　雲立渡礼　見乍将偲　見
②巻七　池邊 小槻下 細竹苅嫌 其谷 公形見尓 監乍将偲　監
③巻七　朝月　日向山　月立所見　遠妻　持在人　看乍偲　看
④巻二十 和我都麻母 畫尓可伎等良無 伊豆麻母加
多妣由久阿礼波　美都々志努波牟　美
⑤巻二十 安之我良乃 夜敝也麻故要弖 伊麻之奈波
多礼乎可伎美等　弥都々志努波牟　弥

ところで、この表では「み」と「め」と「も」が甲乙の二列に振り分けられています。今では同じ「み」でも、言葉や単語によって「弥」或いは「美」を使う言葉と、「味」を使う言葉の二種類があったことが分かります。これは‘ま行’に限ったことではなく、‘か行’にも見られ‘は行’ではイ列とエ列に、‘さ行’‘た行’‘な行’‘や行’‘ら行’のオ列にも見られます。

万葉仮名が使われていた時代では、現在のように五母音でなく、八母音であったというのが通説で、上代特殊仮名遣と呼ばれています。これは江戸時代の本居宣長なども気が付いており、その弟子石塚龍麿の『仮名遣奥山路』にも書かれています。そして橋本進吉が昭和になって二つの区別が発音の違いに基づくものと講義して広まりました。

この表をよく見ると、“も”は万葉集などでは甲乙が一括りにされており、古事記だけが分離されています。飛鳥・奈良の時代には区別して発音されていたものが、平安時代になると消滅してしまったようです。古事記には、書かれたとされている712年より、ずっと時代が下ってから創作された疑念があります。古事記偽書説です。しかし、古事記には“も”が厳然と書き分けられていることが、偽書説を否定する大きな根拠とされているそうです。

さて、この八母音説が、昭和50年に入り松本克己氏によって否定される事態となり、やよい塾にも登壇された森博達先生が七母音説を主張するなど混沌としてきました。2012年に京大文学部の公開講演会が開催され、国語学や比較言語学の専門研究者が、文法構造や音韻の比較から、日本語の起源に関する最新の研究成果を議論しました。しかし、上代特殊仮名遣における母音数の問題は、「なぜ子音を伴わないア行に乙類がないのか」など解決できなかったようです。上代を知る平安の学者なら、上代らしく“も”の字を書き分けることができそうな気もするのですが、現代でも結論が出せない音韻学の実態を平安の学者がどこまで認識できたのでしょうか。

本居宣長六十一歳自画自賛像

※ 古代史(弥生時代～飛鳥時代)に疑問をお持ちの方、疑問・質問・反論　大募集　(体裁は自由ですが、文書でお願いします)